

児期の形成手術はその後の顎顔面成長と機能発達に大きな影響があり、それに先立つPNAMは術式へ影響する。なぜならPNAMが奏功すれば、GPP (gingivo-periostoplasty) が可能となり、学童期の顎裂部骨移植をせずに済む可能性があるからである。我々は成果がまとめられる約十年後の長期的なエビデンスを蓄積すべく努力している。

一般演題

演題1. 患者がわかる歯科用語についての調査

○峯田 武典, 寺内 貴廣, 深澤 翔太,
村上 智基

岩手医科大学歯学部5年

目的: 本研究は、医療従事者が一般の方には認知されていないと考えている歯科用語が、実際に認知されていないかどうかを検証するために行った。

方法: 岩手医科大学歯科医療センターにおいて、216名の外来患者と117名の同施設で診療を行う歯科医師、臨床実習を行う歯科学学生61名を対象にアンケート調査を行った。

40項目の歯科用語に対し、患者には知っているかを、歯科医師と歯科学学生については一般の人が知っていると思うかどうかを質問した。対象のグループの間の解答の分布の差はカイ二乗検定で検討した。

結果: 40単語中、最も患者が知っているとしたのは「歯周病」(99.5%)で、「乳歯」(99.0%)、「抜歯」(97.7%)の順であった。知っているとした患者が最も少なかったのは「TEK」(10.4%)で、次いで「仮封」(10.8%)、「クラスプ」(10.9%)であった。「歯垢」と「プラーク」、「糸切り歯」と「犬歯」の2つの別の言葉が同じ意味を表す2組についての比較では、「歯垢」(97.2%)が「プラーク」(85.3%)よりもよく知られている一方、「糸切り歯」と「犬歯」は患者には同じ割合で知られていた(94.4%)。カイ二乗検定により40の用語のうち22の用語で統計的に有意な差が確認された。

歯科医師や歯科学学生が患者の認知度が高いと考えていた「齶蝕」や「スケーリング」は患者

のほとんどが知らなかったのに対して、「口腔」や「口角」は歯科医師や歯科学学生の想像以上によく知られていた。

考察: 口腔保健用語が多く多くの患者に知られていたことを考えると、歯の健康に対する取り組みや、審美性に関する意識の向上が認知率に大きくかかわっていると考えられる。また言葉の置き換えが認知度の差違の要因の一つとして考えられる。

結論: 歯科医師・歯科学学生が専門的であると思っている歯科用語の中には、多くの患者が認知しているものもあることが示された。

今後、歯科医療を国民により理解していただくには、歯科用語のさらなる認知度の向上の検討が必要と考える。

演題2. 侵襲性歯周炎罹患患者における歯周組織再生の一例

○藤本 淳, 藤本 梓, 阿部 仰一*,
大川 義人,**佐々木大輔,**村井 治,**
八重柏 隆**

盛岡市開業, 茨城県笠間市開業*, 岩手医科大学歯学部口腔機能保存学講座歯周・歯内治療学分野**

歯周組織再生療法の適応は、垂直性骨欠損で骨壁数が多い症例とされている。今回、侵襲性歯周炎罹患患者の抜歯適応歯が、歯周組織再生療法の一つであるエムドゲイン® (EMD) を用いて保存可能となった症例を経験したので報告する。患者は34歳の女性。主訴は歯肉の疼痛であった。初診時、全顎的に4-8mmの歯周ポケット(PD)を認め、PD 4mm以上の部位が68.5%、プロービング時の出血部位が67.9%、初発年齢、骨吸収状態より侵襲性歯周炎と診断した。本症例では歯周基本治療終了後の歯周外科処置において、抜歯適応歯にEMDを適用した。その結果、エックス線写真で垂直性骨欠損部に著しい歯槽骨再生を認めた。今回の症例から、侵襲性歯周炎患者における歯槽骨再生には、年齢等の要因が深く関与していると考えられた。